

第13章

倫理学とはどんな学問か —アリストテレスの視点 から—

柴崎文一

bash@ccre.soken.ac.jp

教育研究交流センター

13.1 はじめに —科学・社会・倫理—

「科学と社会」という課題設定の背景には、「科学における倫理性」という問題意識が潜在している。しかし一口に「倫理」や「倫理性」と言っても、その意味するところは必ずしも自明ではない。そこで本章では、「倫理学」そのものの起源へと遡り、「倫理」および「倫理学」の本源的意味と課題を確認することにしたい。これは「科学と社会」という、言わば応用倫理的な問いへと立ち向かうための、一つの基礎的考察である。

13.2 「哲学」と「倫理学」

「倫理学」は「哲学」を構成する一領域であり、「哲学」は古代ギリシアの知的活動に源を有する学問の一つである。

「哲学」の語源はギリシア語の φιλοσοφία にある。この語は、φιλεῖν（愛する）と σοφία（知）の二つの要素から成っている。古代のギリシア人たちは「知」の根本的対象として、「真」ἀλήθεια・「善」（τὸ）ἀγαθόν・「美」（τὸ）καλόν という三つの基本概念を措定していた。ここから、「真」なるものについての知 σοφία を愛し求める「理論学」θεωρητική、「善」なるものについての知 φρόνησις を愛し求める「実践学」πρακτική、そして「美」なるものについての知（術）τέχνη を愛し求める「制作学」ποιητική という、「哲学」を構成する三つの基本領域が成立することになった。これをアリストテレス（B.C. 384-322）が確立した学問の体系*1、及び現代の哲学区分と対応させるなら、おおよそ図1（p. 233）のように整理することができる。

アリストテレスによる「哲学」の体系区分は、基本的に、当該の学的営み ἐπιστήμη が係わりをもとうとする対象の本質的特性に基づいている。この本質的特性には、まず二者が大別される。一つは「それ以外の仕方においてあることのできないもの」であり、もう一つは「それ以外の仕方においてあることのできるもの」である*2。

「それ以外の仕方においてあることのできないもの」とは、そのものの真理 ἀλήθεια が認識できるようなもののことである。このようなものの典型として、アリストテレスは「自然」φύσις と「数」ἀριθμός と「神的な存在」

*1 Cf. [1] 1025b18-26, 1064a16-19. アリストテレスの原典に対する参照指示および原典からの引用については、慣例にしたがい、ベッカー版のページ数等を表示する。

*2 [3] 1139a7-8.

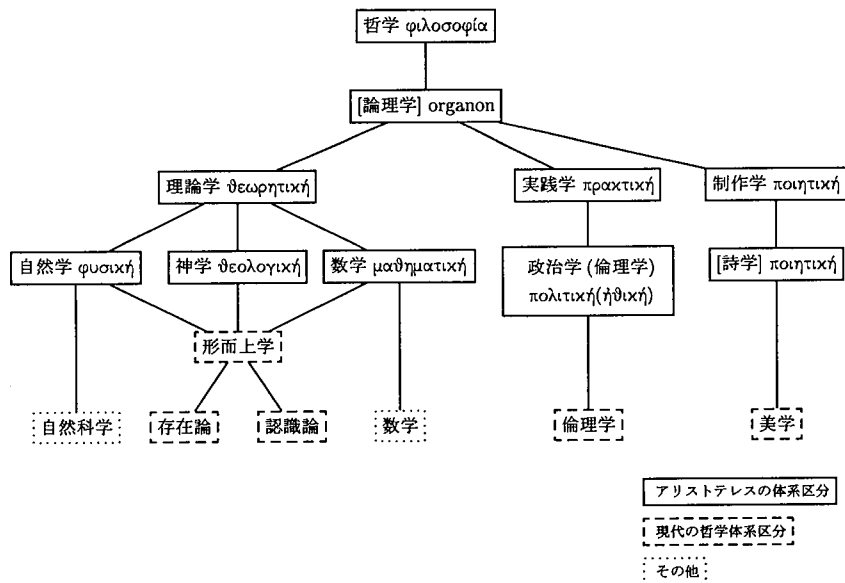


図 1: アリストテレス哲学の体系と現代の哲学区分

τὸ θεῖον をあげている*3。そしてこれらについての知 σοφία の獲得をめざす学的領域が、総称して「理論学」θεωρητική と呼ばれる。

一方、「それ以外の仕方においてあることのできるもの」の典型としては、人間の行為 πράξις と制作活動 ποίησις があげられる。そして前者に係わる知 φρόνησις についての探求領域が「実践学」πρακτική と名づけられ、後者に係わる知 (術) τέχνη の探求領域が「制作学」ποιητική と名づけられる*4。

図 1 から明らかなように、現代の哲学区分は、ほぼこうしたアリストテレスによる学問 (哲学) の体系区分に拠っている。そして今日、我々が「倫理学」と呼んでいるものも、アリストテレスの言う「実践学」にその淵源を

*3 [1] 1064b2-3.

*4 [3] 1140a1-2.

有している。したがって以下本小論では、しばらくアリストテレスの説によりながら、「倫理学」に認められる基本的な概念規定を確認してみたい。

13.3 アリストテレスは倫理学書を独立した書物として書いていない

今日、アリストテレスの倫理学書として伝えられているものには次の三つがある。

『ニコマコス倫理学』 Ἠθικά Νικομάχεια (Ethica Nicomachea)

『エウデモス倫理学』 Ἠθικά Εὐδήμεια (Ethica Eudemia)

『大道徳学』 Ἠθικά μεγάλα (Magna Moralia)

これらのうち『大道徳学』は、後人の手による偽書であると見られている。『エウデモス倫理学』については、今日、ほぼアリストテレスの著作であろうと見られているが、その成立をめぐる、なお議論の余地がないわけではない*5。したがってここでは、『ニコマコス倫理学』をおもな手がかりとしながら、彼の「倫理」ないし「倫理学」に関する概念規定を確認してみることとする。

『ニコマコス倫理学』については、構成上の観点から、興味深い点を指摘することができる。まずこの書の冒頭部分には、実践学的（倫理的）研究が必然的に「政治学」 ἡ πολιτική へと発展することになるという指摘が見られる*6。そして末尾では、「国制」 πολιτεία に関する議論の必要性を提起しながら、この書は未完のまま終わっているのである。これらの点から見て、

*5 Cf. [5] pp. 389-415.

*6 [3] 1094b10-11.

『ニコマコス倫理学』は、「国制」に関する議論をテーマとする彼の『政治学』τὰ πολιτικά と緊密に呼応していることは明らかである。したがって、しばしば指摘されるように、元来、アリストテレスの構想においては、広い意味での国制、すなわち「社会」全般のあるべき姿に関する学としての「政治学」が念頭にあり、とりわけ社会の構成員たる個人のあるべき姿を扱った前半部が、後人によって独立させられ、「アリストテレスの倫理学書」として流布するようになったとも考えられる*7。またこうした見方は、『ニコマコス倫理学』の中では、独立した学問領域としての「倫理学」を意味する ἡ ἐθικὴ という表現が一度も使用されていないということともよく符合している。

しかし私見では、むしろ、彼の構想においては、まず「実践学」πρακτικὴ という大きな枠組みがあり、その中で、とりわけ個人としての人間のあるべき姿に力点を置いた部分が、現在一般に彼の倫理学書として流布するものの中に表されており、社会のあるべき姿を論じた部分が、『政治学』に相当すると考えた方が、アリストテレス哲学全体の体系性とよく整合するように思われる。

13.4 アリストテレスの『政治学』は、いわゆる「政治学」ではない

ここでアリストテレスの『政治学』について、一言注意を喚起しておくことにしたい。今日、「政治学」という言葉から連想されるものは、現代社会の政治システムや政策に関する社会科学的な調査・研究であろう。しかし、アリストテレスの『政治学』で述べられている事柄は、このような現代的な意味での「政治学」とは異なる点が多い。

確かに『政治学』のなかでも、当時のギリシア世界に存在していた様々な

*7 Cf. [6] pp. 46 f.

政治システムや政策に関する批判的な検討は行われている。しかし、『政治学』全体が目差すところは、むしろポリス πόλις という言葉で呼ばれる「社会」のあるべき姿を積極的に提示することであり、現実の政治システムや政策に関する検討は、こうした積極的な提言を行うための準備的考察であると言える。換言すれば、『政治学』の射程は、現代のいわゆる「政治学」よりもずっと大きく、敢えて言えば、「社会哲学」という名で呼ばれるべきものに近いのである。

ここで一つの批判が予想される。それは、アリストテレスが『政治学』において語っているポリスは、あくまでも当時のアテネに代表されるような「都市国家」であって、これを今日の「社会」と同一視することはできない、とするものである。

確かに『政治学』においてアリストテレスが理想的なポリスのあり方としてあげている個々の事項は、当時の歴史的条件に制約されたものであって、これをそのまま短絡的に現代社会に適用することはできない。しかし同じく当時の歴史的諸条件の下で成立している倫理学書の中から、多くの普遍的な論点を汲み出すことが可能であるように、彼が「政治学」ή πολιτικήの体系において念頭においている概念としての「ポリス」πόλιςに、同じく普遍的側面を読み取ったとしても、このことのどこに問題があるというのだろうか。むしろ、このような解釈を否定するということは、アリストテレスの「政治学」には、時代を超えて生きつづける普遍的側面が全くないと主張することに等しいと言える。

筆者はここで、アリストテレスが理想的な社会の成立要件として提示した個々の具体的事項を、現代社会にそのまま適用しようとしているのではない。筆者がここで行っていることは、「倫理学」という学問のルーツであるアリストテレス実践学の体系において、「社会」πόλιςという概念がもつ形式的役割を確認しているにすぎないのである。

加えて、『政治学』の原題とされる τὰ πολιτικά は、独立した学問としての「政治学」ἡ πολιτική を意味するものではなく、「ポリスにかかわる様々なことから」といった意味の中性形容詞複数形から成っているという点にも注目しておきたい*8。このことは、すでに標題からも、彼のこの書は、限定された意味での「政治」を扱うものではなく、ポリスという言葉で呼ばれる「社会」の諸問題を扱うものであるということを示唆していると言えよう。したがって、『政治学』という和訳名から、現代の社会科学における「政治学」をイメージすると、大きな誤解にもつながりかねないので注意が必要である。

13.5 アリストテレス実践学の根本課題 —善と幸福—

概して言えば、「倫理学」は伝統的に、「善」(τὸ ἀγαθόν, bonum, ないしは「正義」δικαιοσύνη, justitia の探求に係わるものであったと言ってもよいだろう。

アリストテレスの実践学(倫理学)も、この両者に関する深い考察を含んでいる。しかし、彼の探求がいかに精緻な「正義」に関する考察を含んでいようとも、彼の実践学的探求全体を強く貫いているものは、「人間にとっての善」*9とは何であるのかという「問い」の探求であるということは明白である。そして彼のこれに与えた答えが、「幸福」εὐδαιμονία の実現なのである。

*8 これは筆者の単なる推測に過ぎないが、「政治学」を意味する英単語の politics が単数扱いの複数形であるのは、アリストテレスの『政治学』τὰ πολιτικά が複数形の表現であるということに関係しているのであろうか。もしそうであるなら、現代の politics は、元来の意味からだいぶ離れているようである。しかし、言うまでもなく、アリストテレスの時代と現代とでは、「社会」の状況が大きく異なるのであるから、言葉の意味が変化しているのも当然であると言えるかもしれない。同様のことは、他の様々な学問領域を意味する表現についても言える。

*9 [3] 1094b7.

アリストテレスによれば、人間にとっての「幸福」とは、人間の本来もつ働き *ἔργον* が十分に発揮されたときに実現されるものであるとされる*10。そしてあらゆる存在者のうちで、人間にのみ見出される固有の働きとは、「ロゴス *λόγος* を有した（心 *ψυχή* の）活動 *πρακτική*」*11に基づくものであるとされる。ロゴス *λόγος* とは、ギリシア語で「理性」、*「論理」*、「言葉」等を意味する極めて多義的な語である。しかし、いずれにしてもアリストテレスに従えば、人間は、こうした「ロゴスを有した心の活動」を勝れて遂行することによって、「幸福」を実現できるというのである。

さらに、「ロゴスを有した心の活動」を勝れて遂行することが「徳」 *ἀρετή* であるとされる*12。それ故にまた、「徳」に基づく心の活動こそが「善」であり、人間にとっての本来の「幸福」の実現にもつながるとされるのである*13。

13.6 「知性的徳」と「倫理的徳」

「ロゴスを有した心の活動」には、二種類あるとされる。一つは、言わばロゴスの力に与って「思考」 *διάνοια* を展開するものであり*14、もう一つはロゴスに従って「実践」 *πράξις* を志向するものである*15。前者の卓越性が「知性的徳」 *διανοητική ἀρετή* と呼ばれ、後者の卓越性が「倫理的徳」 *ἠθικὴ ἀρετή* と呼ばれる*16。

「知性的徳」には、観照 *θεωρία* において「真理」 *ἀλήθεια* を認識すること

*10 [3] 1097b24.

*11 [3] 1098a3-4.

*12 [3] 1098a15.

*13 [3] 1092a15-18.

*14 [3] 1103a14.

*15 Cf. [3] 1098a3-5.

*16 [3] 1103a14-15.

によってもたらされる「知」 σοφία のレベル ἐξις と、人間の実践 πράξις によって到達可能なもろもろの善のうちから最善なもの τὸ ἄριστον を見極める「実践的思量」 φρόνησις のレベルがあるとされる*17。しかし人間の「幸福」は、究極的には、観照においてロゴスの力に与りつつ「真理」を認識することによって実現されることになる*18。何故なら、上述のとおりアリストテレスによれば、人間の幸福は、「徳」に基づく心の活動によって実現されるものであるが、真理の認識によってもたらされる「知」の境地こそが、あらゆる「徳」のなかで最高のものとされるからである*19。彼のこうした考え方は、観照に基づく真理の探究（理論学）を最上のものとする、彼の哲学体系とよく合致している*20。そしてこのような「知性的徳」の獲得には教育（教示） διδασκαλία の果たす役割が大であるとされる*21。この点は、彼の「実践学」を構成する一方の主要著作としての『政治学』が、理想的な国家（社会）の実現における教育 παιδεία の意義を説きつつ締めくくられていることともよく符合する。また、「知」こそ「善」であり至福の境涯であるという主張は、プラトンの学園アカデメイアに学び、自らもリュケイオンを開いた彼自身の経験に基づく信念であったのかもしれない。

13.7 「倫理的徳」は習慣から生まれる

「倫理的徳」 ἠθικὴ ἀρετὴ は習慣 ἔθος から生じるとされる*22。またギリシア語の ἠθικὴ（倫理・道徳）は、ἦθος（人柄）と同根であり、ἦθος は語源的に ἔθος（習慣）に由来している*23。ここから、「倫理的徳」は「人柄」

*17 Cf. [3] 1103a5-6.

*18 [3] 1177a17-18.

*19 Cf. [3] 1141a18-20.

*20 Cf. [1] 1026a22-23.

*21 [3] 1103a15.

*22 [3] 1103a17.

*23 Cf. [4] pp. 377 f.

や「人となり」の卓越性を意味するものであり、「習慣」に基づいて形成されると考えられていることがわかる。さらに *ῥηθος* には「住みか」や「住み慣れた土地」といった社会性・人倫性を予測させる意味もあるところから、アリストテレスは、「倫理的徳」というものを、自然本性的に人間が所有しているものとは考えておらず^{*24}、具体的な社会生活における実践をとおり、習慣づけられることによって形成されるものであると考えているとも言えよう^{*25}。だからこそここに、こうした習慣づけの基盤となるべき社会すなわちポリス *πόλις* のあるべき姿についての学たる「政治学」*ἡ πολιτική* が要請されてくることになるのである。

13.8 ポリスとロゴス

既に指摘したとおり、アリストテレスの『政治学』は、その和訳標題から受ける印象とは異なり、実際にはポリスという名で呼ばれる社会のあるべき姿の提示が主題となっている。これは一つには、上述の如く、『ニコマコス倫理学』で説かれた「倫理的徳」の形成基盤たる社会すなわちポリスの原型を示すという、彼の実践学的要請に基づいている。実際、『ニコマコス倫理学』のうちには、彼の実践学的考察が必然的に社会 *πόλις* の学たる「政治学」*ἡ πολιτική* を要請するものであるという趣旨の論述がしばしば見受けられる^{*26}。

しかし、このようなアリストテレス実践学の体系性からくる形式的要請に基づくばかりではなく、ポリスの学たる「政治学」の必要性は、彼の基本的な人間理解にも深く根ざしているものであるという点を見過ごしてはならない。既に見たとおり、アリストテレスの実践学的探求は、「人間にとっての

*24 [3] 1103a18-19.

*25 [3] 1103b14-25.

*26 [3] 1094a27-28, b10-11, 1099b28-32, 1102a5-13, 1181b12-23.

善」の探求から出発している。そしてアリストテレスによれば、人間にとっての善とは、人間が本来持っている働き $\epsilon\rho\gamma\omega\nu$ を遺憾なく発揮することによって幸福を実現することであり、この「働き」は、「ロゴスを有した心の活動」であるとされていた。ここで彼の『政治学』に目を転じるなら、この書の冒頭部分で、彼が「人間は本来ロゴスを有するものであるが故に、ポリスを形成するのである」と指摘していることが、改めて注目される^{*27}。

しかしながら、「人間は本来ロゴスを有するものであるが故に、ポリスを形成する」ということの意味は、決して自明なものではない。上述のごとく、ロゴス $\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ は、ギリシア語で「理性」、「論理」、「言葉」等を意味する極めて多義的な語である。このようなロゴスについて、アリストテレスは『政治学』のなかで、とりわけ「有益なこと、有害なこと、したがって正しいこと、正しくないことを明らかにする」という働きがあるという点について着目している^{*28}。そして人間は、このようなロゴスを有するが故に善悪正邪を区別できるのであるが、これはすなわち善悪正邪に関する共通の判断基準を所有しているということにほかならない。言い換えるなら、人間がロゴスを所有しているということは、善悪正邪に関する判断基準を共有しているということにほかならず、この「共有性」に基づいて人間は共同体すなわちポリスを形成するとされるのである^{*29}。

ここで再びアリストテレス実践学の出発点に立ち戻るなら、「ロゴスを有した心の活動」を十全に発揮することが人間にとっての「善」であり、その実現に向けた学的探求こそ、彼が「実践学」に与えた根本課題であった。そしてここに見るとおり、言わば人間のロゴス性に基づいてポリスすなわち社会が必然的に形成されるのであれば、やはり必然的な仕方では、人間にとっての「善」の実現に向けた学的探求たる「実践学」は、さらにポリス $\pi\acute{o}\lambda\iota\varsigma$ のあるべき姿に関する探求としての「政治学」 $\eta\ \mu\omicron\lambda\iota\tau\iota\kappa\eta$ へと展開することに

*27 [2] 1253a1-11.

*28 [2] 1253a14-15.

*29 [2] 1253a14-19.

なるということは極めて自然なことであると言えるだろう。

13.9 小括

この小論では、議論が煩雑になることを避けるためにあえて取り上げなかったが、『ニコマコス倫理学』ではさらに、上述のような枠組みのもとで、「倫理的徳」の内容が様々な角度から詳細に論じられている。そしてその内容は、とりわけ個人としての人間のあるべき姿に重点をおくものとなっている。一方『政治学』では、理想的な社会（ポリス）に関するアリストテレスの見解が詳細に論じられている。こうして、実質的には『ニコマコス倫理学』と『政治学』の二著によって構成される彼の「実践学」は、「個人としての人間」と「社会」の両面に関する〈あるべき姿〉についての学として、壮麗な体系を形作っているのである。そして、このようなアリストテレス実践学の伝統に基づくものを、今日我々が「倫理学」と呼ぶのであれば、「倫理学」とは、本来、「個人としての人間」と「社会」の〈あるべき姿〉を探求する学的営みであると規定することができるであろう。

文献

- [1] Aristotelis Metaphysica, Jaeger, W. (1957) recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Oxford U. P., Oxford. (出隆 訳・註 (1968). 形而上学, アリストテレス全集, 第 1 2 卷, 岩波書店, 東京).
- [2] Aristotelis Politica, Ross, W. D. (1957) recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Oxford U. P., Oxford. (山本光雄 訳・註 (1969). 政治学, アリストテレス全集, 第 1 5 卷, 岩波書店, 東京).
- [3] Aristotelis Ethica Nicomachea, Bywater, I. (1894) recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Oxford U. P., Oxford. (加藤信朗 訳・註 (1973). ニコマコス倫理学, アリストテレス全集, 第 13 卷, 岩波書店, 東京).
- [4] 加藤信朗 (1973), 訳者註 (ニコマコス倫理学), アリストテレス全集, 第 13 卷, 岩波書店, 東京. 359-444.
- [5] 茂手木元蔵 (1968), 訳者解説 (『大徳学』『エウデモス倫理学』『徳と悪徳について』の三書に関して), アリストテレス全集, 第 14 卷, 岩波書店, 東京. 389-415.
- [6] 和辻哲郎 (1971), 人間の学としての倫理学, 岩波書店, 東京.